

松本竣介の「立てる像」(1942) および戦時期諸作品における象徴

長田 謙一 (首都大学東京)

松本竣介の短い生涯の中でもとりわけ密度濃い作品が集中して制作された時期は、戦時体制のピークの時期と重なっている。しかしまさにそれゆえに、この時期の松本竣介の作品をめぐる言説は、大きな振幅のなかに置かれてきた。「抵抗の画家」とする評価は、竣介による「戦争画」の相次ぐ「発見」によって大きく揺さぶられ、今では、この時期に描かれた「画家の像」・「立てる像」・「三人」・「五人」のいずれも自画全身立像を含む諸作品は、竣介の純個人的な課題に解決を与えるものとする解釈が有力とされている。この揺れのなかで、これら四点と同時期に描かれた他の作品、とりわけ「風景画」との間に何某かの乖離がもちきたされ、統一した松本竣介像が結ばれにくいきらいがある。しかし、上記四作品と一連の風景画の双方にわたって、この期の竣介諸作品にはしばしば、それ以前の作品に顕著となっていたグロッシ的線描モンタージュにかわる抑制された象徴・寓意が潜むことに注目し、その意味を探ることによって、新たな松本竣介像が結ばれないであろうか。

とりわけ重要なのは「立てる像」(1942)の再検討である。なぜなら、「立てる像」の背景となった風景の現場を丹治日良とともに特定した洲之内徹の文章に含まれた事実誤認が上記全身自画像群の解釈に無視し得ない影響を与えてきたと考えられるからである。洲之内らは、「立てる像」の背景の現場が、高田馬場駅から程近くで神田川にかかる田島橋とその南詰にそびえる目白変電所であることを明らかにした。しかし洲之内は、同時に、田島橋前景が左右逆転されて描かれているという判断をも加えた。洲之内のこの判断は、その後の「立てる像」解釈に微妙な影を落とし、この画にことさらに否定的な意味を読み取ろうとする傾向を招いた。しかし、竣介が描いた当時、目白変電所の前景右手前には、神田川直線化工事で埋め立てられた空き地がそのままごみ集積所となっていたのであり、また左手には三越の染物工場が操業しており、「立てる像」やそのもととなった素描「ゴミ捨て場付近」の描くとおりの情景が広がっていたのである。こうして、「立てる像」に意図的に否定的な意味が込められていたとする論拠の最重要のひとつは失われる。かわって、従来看過されてきたいくつかの画面諸要素がむしろポジティブな意味を画面に潜ませるものとして注目されてよいであろう。朝の光、竣介胸元赤青二色に分割された下シャツ等である。

画面に託された象徴ないし画面外の意味への指示をふくむ表現は、「ニコライ堂」におけるニコライ堂それ自体とスラム街に通じるガードの連結、「議事堂のある風景」における陸軍参謀本部の捨象、さまざまな構築物の十字架への変容等、この時期の特に重要な風景画の特質でもあり、「三人」・「五人」を含む一連の群像に見られる煙突(死)、給水塔(生命)等の象徴にも連なり、戦時期松本竣介作品解釈上重要な意義を有すると考えられる。